ずるがしこい狐たち

漢文は、堅苦しくて説教くさいおじさんばかり出てくるからと、何となく苦手意識を持っていませんか。しかし思い出してみてください。教科書に載っている漢文教材には、実は、さまざまないきものが登場しています。例えば、故事成語の教材だけを考えても、「漁夫の利」には鳥と貝、「蛇足」には蛇、「朝三暮四」には猿、「虎の威を借る狐」には虎と狐が出てきました。そういったいきものたちに意識を向けて読んでみると、漢文の世界が少し違って見えてくるかもしれません。この本は漢文や漢詩に出てくるいきものたちに目を留めて、漢文世界の少し柔らかい部分を一緒に味わっていくための、寄り道ばかりのガイドブックです。

さてそれでは、早速、漢文世界のいきものに出会っていきましょう。まず手始めに「虎の威を借る狐」を取り上げてみます。中国では同じ意味で「狐仮虎威（狐 虎威を仮る）」という表現を使います。そのため、「狐仮虎威」の形でこの故事成語を掲載する漢和辞典もあります。

出典は『戦国策』楚策です。あらすじを見てみましょう。

あるとき虎が狐を捕まえました。狐は虎の餌食になりたくない一心で、自分が天帝に選ばれた存在であり、食べると天帝の怒りを買うと虎に信じ込ませるための一計を案じます。狐は虎を後ろに従えて歩き、動物たちが虎を畏れて逃げ出すところを見せたのです。虎は畏れられているのが自分だとは気づかず、狐の言うままに、天帝に選ばれた存在であるから動物たちは狐を畏怖しているのだと誤解し、狐は命拾いをしたのでした。

教科書ではしばしばこの例え話の部分だけが取り出されていますが、『戦国策』の本文ではこの例え話が語られた状況が描かれています。戦国時代（前四〇三―前三二）の楚（荊）の国でのこと。宣王は家臣たちに、「北方の国々は昭奚恤を恐れていると聞くけれども本当かね」と尋ねます。楚は南方の大国ですから、「北方」とは広く楚以外の国を指すのでしょう。昭奚恤は楚の政治家で、当時非常に強い権力を握っていた人物です。答えかねて家臣たちが黙り込んでしまう中で、口を開いたのが江乙でした。

江乙はまず先ほどの例え話を語り、それから、この例え話の狐と同じように畏れられているのは昭奚恤自身の実力はなく、王の威光なのだと説明しました。それに対する王の反応は書かれていませんが、北方の国々が自分の威光を畏れているのだと言われれば、恐らく悪い気はしなかったでしょう。

『戦国策』のこの後に続く記事を読むと、どうやらこの江乙という男は魏の国のスパイであるらしく、強国である楚を弱体化させて魏のピンチを救うべく、宣王と昭奚恤の仲を裂こうとしているようです。そうであれば、江乙は、自身の威光を笠に着る昭奚恤を宣王が僭越だと思い、不快感を覚えるように仕向けているとも考えられます。

ところで、虎を騙す動物はなぜ狐だったのでしょうか。当時の中国では身近な強い肉食獣といえば虎でしたから、王の喩えとして虎が出てくるのは不思議ではありません。ですが虎に食われる動物は狐でなくともよさそうです。その謎を解くために、狐という動物の持つイメージを見ていきたいと思います。

疑うことを意味する「狐疑」という言葉は、春秋戦国時代にも用いられています。例えば戦国時代の兵法書『呉子』の「治兵篇」には「三軍之災生於狐疑（三軍の災は狐疑に生ず）」とあります。軍を率いる者が疑い惑っていると全軍に大きな被害が出るという意味です。「狐疑」の語源は狐と関係ないようなのですが、『史記』巻九「呂太后本紀」中の「狐疑」という言葉に付された唐代の注釈（索隠）には「狐は疑い深い性質である」と説明されています。実際の語源はどうあれ、「狐疑」という語は狐の「疑」（猜疑心の強さや慎重さ）を連想させやすい語であったようです。

狐のイメージは猜疑心の強さや慎重さだけではありません。『史記』巻四八「陳渉世家」の逸話は狐に神秘的なイメージがあったことを窺わせます。

秦王朝（前三二一―前二〇六）滅亡のきっかけとなった陳勝呉広の乱の直前のできごとです。何事にもまずはイメージ戦略が必要であると知っていた陳勝と呉広の二人は、赤い文字で「陳勝が王になる」と書いた布を魚の腹の中に仕込みます。その魚を買って食べた下級役人たちは、布を見て訝しがります。夜になると、呉広は祠の傍らで狐の鳴き声を真似て、「大楚が勃興し、陳勝が王になる」と叫んで聞かせました。楚の国（大楚）は、秦の始皇帝が天下を統一する際に滅ぼされていますが、そのとき楚は秦を恨み、「楚は三戸と雖も、秦を亡すは必ず楚なり（楚の民が三戸しか残らなかったとしても、秦を滅ぼすのは必ず楚である）」との言葉が残るほどでした（『史記』巻七「項羽本紀」）。その楚が再興して、秦を倒し、陳勝が王になると、祠の横で狐が予言したわけです。魚と狐の予言によって、下級役人たちは大いに畏れ、皆が陳勝の様子を窺うようになりました。

農民である陳勝と呉広が反乱を起こすと言っても、周囲は現実味がないと思ったかもしれません。しかし、陳勝が王になると二回も予言されたということになれば話は別です。人々の心は動き、反乱は秦王朝滅亡のきっかけとなりました。この巧みなイメージ戦略において、神秘的な予言の演出に利用されたのが、祠のそばに潜む狐だったということになります。実際には呉広が狐の声を真似たというだけで姿が見えているわけではありません。それでも狐の鳴き声と敢えて書かれていることからは、神の予言を人々に伝える役割は狐にこそ相応しいというイメージがあったことが

窺えます。

このように狐は、猜疑心が強く慎重だったり、予言ができたりと、いい意味でも悪い意味でも、賢く、有能な存在、優れた知性を持つ存在として、イメージされていたように感じます。だからこそ、のちの時代に人間の女性に化けて人間とロマンスに興じることになる狐（唐代伝奇「任氏伝」など）などが語られるようになってきたのでしょう。なお「任氏伝」については次項で紹介します。

「虎の威を借る狐」では、狐は保身のために咄嗟に巧みな嘘をついていました。他の動物ではなく、賢く有能な狐が選ばれた理由は、狐ならこういうことができるだろう、と思われていたからでしょう。だからこそ宣王たちはこの例え話をスムーズに受け入れることになったと言えそうです。

隠れて暮らす化け狐たち

前項に続き、狐のお話です。

狐は日本のものがたりの中でもしばしば人の姿に化けますが、中国のものがたりでも人に化けることがありました。例えば東晋（三一七―四一九）・干宝『搜神記』巻一八には、長い年月を生きた狐が不思議な力を得て、人間の若者に姿を変えて張華（二三二―二〇〇）という知識人のもとを訪れた故事が載っています。張華は若者の見識があまりに深いので、狐なのではないかと疑い、結局、狐は正体が知られて殺されてしまった、という話です。

『搜神記』で張華に会いに来た狐は男性に化けていましたが、狐は女性にも化けます。唐代伝奇「任氏伝」は、「任氏は女妖なり」という一文から始まり、美女任氏が妖であることが読者に最初から明かされています。ものがたりの冒頭、うだつの上がらない貧しい青年鄭六に見初められ、狐の妖であることを知られていながら、任氏は彼の愛人になります。鄭六の親戚であり、金持ちの韋崟も任氏をいたく気に入り、鄭六と任氏は韋崟の経済支援を受けながら幸せな日々を過ごします。